

平成30年6月1日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12839

研究課題名(和文) 想起のトポグラフィー：日本とドイツにおける戦争の文化的記憶と空間表象の分析

研究課題名(英文) Topography of Memory: Analysis of Cultural Memory and Spatial Representation of War in Japan and Germany

研究代表者

安川 晴基 (Yasukawa, Haruki)

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：60581139

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、冷戦後のドイツでナチズム・戦争・ホロコーストのトラウマ的な過去がいかに想起されているかを調べた。特に公共空間における歴史表象のあり方に着目し、主に1990年代以降のベルリンに誕生したモニュメント、ミュージアム、パブリック・アートを分析した。比較のために、日本における戦争の記憶を象徴的に体現する諸々の「想起の場」も調べた。再統一後のドイツが推進する「想起の文化」では、対外的には欧州統合の枠内で民主主義国としての自国の政治的輪郭を明確にするために、対内的には国民統合を強化するために、ナチズムとホロコーストの記憶が、対照的否定像として共同想起の中核に位置づけられていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This research project studied, how the traumatic past of the Nazism, WWII, and the Holocaust is remembered in Germany after the reunification. Especially, my project focused on the historical representation in the public space and analyzed mainly monuments, museums and installations created in Berlin after 1990. For comparison, I investigated places of remembrance of the War in Japan. The results indicated that in Germany after the reunification the socio-political practices of remembering the Nazi past (i.e. the culture of memory) intend to symbolize the traumatic past as a contrastive self-image, on one hand in order to clarify the political profile of Germany as a democratic state within the framework of the EU, and on the other hand so as to strengthen the integration of the reunified nation.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：記憶 想起の文化 ドイツ ナチズム ホロコースト ミュージアム モニュメント 空間実践

1. 研究開始当初の背景

再統一後のドイツでは、1990年代以降、ナチズムやホロコーストなど、自国の負の過去をテーマとするモニュメント、ミュージアム、パブリック・アートが数多く設置され、記憶の景観が大きく塗り替えられている。戦後長らく抑圧され、忘れられてきたナチス犯罪の記憶は、今日のドイツにおける共同想起の営みの中で前景に押し出されている。このことは、戦前のファシズム体制、戦争と敗戦、戦後の民主主義国としての再出発、経済復興と西側先進国への仲間入りといった、似たような現代史をたどってきた日本とは際立った対照をなしている。また、国民的想起の歴史を振り返ってみても、自国の犯罪的過去を、可視的象徴を与えて公共空間で積極的に想起することは、類例がない。再統一後のドイツの公共空間における、自国のトラウマ的な記憶のこの遍在は、どのような社会的・政治的文脈から生じたのだろうか。そしてこの記憶は、再統一後のドイツの国民的アイデンティティをめぐる言説の中で、どのような位置を与えられているのだろうか。こうした問題意識から本研究を企図した。

2. 研究の目的

本研究は、冷戦終結後の1990年代以降にドイツと日本で設置あるいは改築され、現在運営されている、第二次世界大戦やジェノサイドをテーマとするモニュメント、ミュージアム、パブリック・アートの空間デザインを調査する。それらのメモリアル建造物は、社会的な想起の営みが行なわれる空間的枠組みをなしており、過去のイメージが可視化され、感性的に経験され、共有されうる可能性の条件を、そこを訪れる人々に提供している。本研究はまず、それらのメモリアル建造物が、それぞれの空間分節によってどのような歴史解釈を明示的・暗示的に表現しているかを、現象学的空間論、パフォーマンス論、集合的記憶論の最新の知見を応用しながら解読する。さらに、それらのメモリアル建造物が表現する過去表象を、歴史的・政治的・社会的コンテクスト(設置の経緯、設立主体による意味づけ、社会的評価)に位置づけ直す。そうして、冷戦終結後の新たな国際秩序を背景とする日独のアイデンティティ・ポリティクスにおいて、自国のトラウマ的な記憶がどのように表象されているのか、その共通点と相違点を探る。

3. 研究の方法

本研究では、個々の具体的なメモリアル建造物に関するフィールドワークと、「文化的記憶」についての理論的研究という二つの柱を設定して、冷戦後のドイツと日本における戦争の記憶の空間表象に迫った。

(1) フィールドワーク

本研究の主要部分をなすのが、ドイツと日本の諸都市にあるモニュメント、ミュージアム、パブリック・アートに関する現地調査と、アーカイブでの関連資料の収集である。ドイツでは、ドイツ歴史博物館(ベルリン)、ベルリン・ユダヤ博物館(ベルリン)、記録センター テロルのトポグラフィ(ベルリン)、フェリクス・ヌスバウム・ハウス(オスナブリュック)、連邦軍立軍事史博物館(ドレスデン)など、ナチズム、第二次世界大戦、ホロコーストをテーマとして扱う主要ミュージアムの常設展における歴史表象を調査した。さらには、ホロコースト警告碑(ベルリン)、同性愛者追悼記念碑(ベルリン)、シンティ・ロマ追悼記念碑(ベルリン)など、ナチス犯罪の犠牲者を対象とする国立中央モニュメントに加えて、1990年代(一部は1980年代)以降にドイツの諸都市の公共空間に登場した、「カンターモニュメント」と呼ばれる一群のパブリック・アートを調査した。調査にあたっては、これらの「想起の場」の空間デザイン(建築様式、象徴方法、展示空間の分節と配列、来訪者の視線と歩行の導線など)を分析し、関連資料によって、それらの想起の場の社会的・政治的コンテクスト(設置の歴史的経緯、公的な歴史政策の変遷、社会的意味づけと評価)を検討した。そうして、それらの想起の場の空間分節が表現する歴史の解釈=物語が、国民的アイデンティティの定義をめぐる今日のドイツの言説の中で、どのような位置を帯びているかを明らかにした。また、ドイツの事例と比較するために、日本における戦争の記憶の空間表象の事例、特に沖縄県糸満市に点在する戦争遺跡と展示施設を調べた。

(2) 理論的研究

フィールドワークと並行して、「文化的記憶」に関する理論的研究を進めた。文化的記憶とは、ドイツの文化学者アライダ・アスマンとヤン・アスマンが提唱したコンセプトで、ある集団がそれを介して自らの過去を選択的に再構成し、集合的アイデンティティを支えるための、組織化され諸々のメディアによって客体化された、共通の知識の蓄えのことをいう。このコンセプトを援用することで、戦争の記憶の問題を、真実か/虚偽かの区別に基づく歴史実証主義的な問題設定と議論の文脈からいったん解き放して、望ましい自己像を構想するために繰り広げられる過去表象をめぐる交渉と闘争という、アイデンティティ・ポリティクスの文脈で捉え直すことができるようになる。本プロジェクトの理論的支柱をなす文化的記憶に関する研究の一環として、「文化的記憶」ならびに、ナチズムの過去をめぐる戦後ドイツの「想起の文化」について書かれたアスマン夫妻の著作を翻訳し、刊行した。

4. 研究成果

(1) 2015年度は主に、1990年以降のベルリ

ンに誕生した、ホロコーストをテーマとするモニュメント、空間インスタレーション、ミュージアムの常設展を対象として、文献の調査収集ならびにフィールドワークを行ない、次の成果を得た。論文「ホロコーストの想起と空間実践」では、1990年代から2000年代にかけて、ベルリン各地区にローカルな次元で設置されたモニュメントやインスタレーションの成立過程と空間デザインを調べ、それらを、中心化されたコメモラシオンの形式(例えばホロコースト警告碑)に対するアンチテーゼとして位置づけ、想起の空間を脱中心的に再編成しようとする空間戦略を分析した。また、論文「個別と遍在のはざままで」では、芸術家グンター・デムニヒが1990年代に開始し、現在、ドイツの国境を越えて近隣諸国にまで広がっている「躓きの石」のプロジェクトを調べた。ナチス犯罪の被害者の名前を、彼らが生前に暮らしていた建物の前の路上に埋めていく、この市民参加型のプロジェクトをパフォーマンス論の観点で分析し、その革新性と問題点を批判的に考察した。これらの事例研究と並行して、再統一後ドイツの「想起の文化」に関する理論的研究も行った。その成果の一つとして、第二次世界大戦後のドイツならびに西洋世界における想起の枠組みの変遷を扱ったアライダ・アスマンの論文「トラウマ的な過去と付き合いのための四つのモデル」を翻訳し、学術誌(『思想』第1096号、「想起の文化：戦争の記憶を問い直す」、岩波書店、2015年、pp.27-50)に発表した。

(2) 2016年度は、前年度に引き続き、主として、壁崩壊後のベルリンに作られた、ナチズムとホロコーストをテーマとするモニュメント、ミュージアム、空間インスタレーションの現地踏査と文献調査を進めた。また、ドイツの事例と比較するために、沖縄県糸満市に散在する戦跡ならびに展示施設の現地踏査と資料収集を行なった。これらのフィールドワークと並行して、本プロジェクトの理論的支柱の一つをなす、アスマン夫妻の「文化的記憶」のコンセプトについて研究を続けた。その成果として、ヤン・アスマンの主著の一つである『エジプト人モーセ：ある記憶痕跡の解読』を翻訳し、藤原書店から出版した。刊行にあたり、「文化的記憶」のコンセプトの概要と、それに基づく「記憶史」の構想について、詳細な解説を付した。この成果と関連して、2017年2月に研究代表者の所属機関で公開セミナーを開催し、「文化的記憶」のコンセプトの意義と、それが文化学に新たにもたらす問題設定の射程について、他分野の研究者たちと意見を交わし、本プロジェクトを推進するための有意義な示唆を得た。

(3) 2017年度前半期は、カッセル、ミュンスター、オスナブリュックにて、ナチズムとホロコーストをテーマとする「カウンターモニュメント」、ミュージアム、空間インスタ

レーションの現地踏査と文献調査を行なった。2017年度後半期は、ベルリンの記録センター テロルのトポグラフィの付属資料室で、これらの「想起の場」の関連資料を収集した。ドイツでの現地調査と並行して、再統一後のドイツの「想起の文化」に関する理論的研究を進めた。その一環として、アライダ・アスマンの著書『想起の文化：忘却から対話へ(仮題)』の翻訳を行なうとともに、再統一後のドイツにおけるナチズムの過去の自己批判的な想起の実践について解説を書いた。この成果は2018年度中に岩波書店から単行本として刊行する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

安川晴基、「ホロコーストの想起と空間実践：再統一後のベルリンにみる『中心』と『周辺』の試み」、『思想』、査読無、第1096号、2015年、pp.98-129

安川晴基、「個別と遍在のはざままで：想起のプロジェクト『躓きの石』をめぐる批判的考察」、『藝文研究』、第109-2号、2015年、pp.194-213

〔学会発表〕(計1件)

安川晴基、「エジプト人モーセ：ある記憶痕跡の解読をめぐる」、WPI-next ユニット「文化遺産創成と記憶の力のテクスト学」公開セミナー、2017年2月24日、名古屋大学

〔図書〕(計1件)

ヤン・アスマン著、『エジプト人モーセ：ある記憶痕跡の解読』、安川晴基訳、藤原書店、2017年、総429頁〔単訳〕

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安川 晴基 (YASUKAWA, Haruki)

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号:60581139

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()